『正親町帝時代史論―天正十年六月政変の歴史的意義―』第五章（岩田書院、2012年）

**「室町幕府の滅亡と統一国家体制」**

はじめに

一　明智光秀の乱とその前提

二　光秀没落の経緯

三　正親町帝の王政復古

四　正親町帝と羽柴秀吉

おわりに―織田・徳川同盟の分断―

補論９「｢覇者｣の類型」

補論１０「『川角太閤記』考」

補論１１「統一国家体制の解体過程について」

※『織田・徳川同盟と王権―明智光秀の乱をめぐって』第五章（岩田書院、2005年）

（原章題「織田・足利新旧武家政権の相殺と王権の浮上」）

初出『郷土文化』第五七巻第三号2003年

（原題「光秀没落の諸事情と国権の移転的推移(王権の浮上)」）

補論９～１１章は、原題「正親町帝と｢覇者｣の類型―織田政権のモラトリアムと｢覇者｣の類型（下)」（『郷土文化』第６３巻第一号、名古屋郷土文化会、2008年）

本論文は、主査の中野等九州大学比較社会文化学府教授から厳重な査読を受けて、前著をより実証性を加味して博士論文として提出し、さらに一部補筆して発刊したものである。

《要約》

　　明智光秀の反乱の失敗は、当時上洛していた徳川家康一行の逃亡を許したことにある。

家康の反転が不可避となることで、光秀の敗北は確定するが、秀吉は毛利氏と和睦して、山崎の戦で室町幕府を組織的に滅亡させる。そして、わずか十二日間で、織田・足利新旧武家政権が相殺され、天皇と関白が一体化した公家一統の体制が構築されたことになる。

1. 光秀叛乱の最大の過誤は、家康の逃亡と細川藤孝がそれに参加しなかったことである。
2. 光秀の盟友藤孝は、室町幕府の御供衆という高官であるとともに、天皇の侍従として、

その地位は両者に近接的に両属するものであった。

1. 藤孝は古今伝授を帝の側近三条西実澄から授かっており、その師弟関係は極めて強い

ものであった。事件直後の藤孝の所在は不明であるが、藤孝に近い実澄の弟子里村紹巴、吉田兼見、大村由己、米田求政、津田宗及などは、朝廷方、秀吉方として積極的に動いている事実がある。

1. 正親町帝は、信長の祐筆となる楠正虎の祖先南朝方の正成の名誉を回復させ、従四位

に任じていた。正虎は、信長存命中に祐筆を務めるなど秀吉と入魂の関係にあり、また松永久秀、朝山日乗など帝の人脈とも強くつながっていた。

1. 秀吉は、毛利氏と講和して反転したが、毛利氏と朝廷の関係は元就の代から深く、秀

吉と小早川隆景・安国寺恵瓊が主導する同盟が半日で成立し、それが天皇と関白が一体化した体制の基盤となった事実経緯がある。

６．天正十年六月政変は、織田・徳川同盟の主導する信長の政権構想に強く反発した光

秀の乱を誘発させ、織田・足利新旧武家政権を相殺することで公家一統・王政復古の体制を実現させるための政変であったことを具体的な史料によって明示した。

1. 補論９では、覇者の類型として、これまで相互規定的であった足利・織田・豊臣・徳

川の権力構造の特質を明示した。